
タダ、降ル雨八赤クカガヤク

クロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タダ、降ル雨八赤クカガヤク

【Nコード】

N4358M

【作者名】

クロ

【あらすじ】

父親に虐待され続け、9歳の時に家を出たキリは、ある組織の殺し屋に拾われる。

決して優しくはないが、言葉には出ない温もりにキリは惹かれていく。

そして生まれつき身体能力に優れたキリは

殺しの仕事をはじめようになる。

本編はその8年後からはじまる。

緋イ刃 ト黒イ霧

初めてだ。

実に「不覚」の二文字に尽きる。

その冷たくとげとげしいモノを
僕の後頭部に突きつけたまま。

前に立つ東洋人風の男が口を開いた。

「俺のコードネームは《黒子》。急に悪いな。」

全くだ。

「それでだな。お前の腕が必要なんだ。戻ってこい」

この男は話の仕方をしらないのたろうか。

「《黒子》？」

「ああ、コレを見せるのを忘れていたな。」

腑に落ちなそうな顔をした僕に

男は高々と掲げた左手を僕に向けて見せた。

黒い薔薇の指輪……。何度見ても趣味が悪い。

「ルガーノの人間ですか……………」

渋い顔をしたように見えたのだろうか。

まあ、実際そうしたのかもしれない。

兎に角、男は「困った」　そういう顔をした。

「そう嫌な顔するなよ」

ところで、余談ではあるが、

男があれこれと話す裏で、

女が僕に突きつけたその銃は
依然、動くことはない。

「仕方がない。」

そう言うと、男は見苦しいほどにピカピカと光る

黒いスーツの中に手を入れ、なにか取り出して見せた。

「これを見る。誰だかわかるな。」

目を疑った。

男が取り出した携帯の画像に写った人は、

僕が一生の中で、唯一《父》と慕う人。

そして、3年前に亡くなったとされるヒト。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4358m/>

タダ、降ル雨八赤クカガヤク

2010年10月20日18時34分発行